

山林に自前の炭焼き窯を一基築いて一年を経た。地場の石と土と水などの素材を駆使して白炭石窯をついた。

そして半世紀余り前、化石燃料を主体と

したエネルギー革命以降、有効利用されなくなつた里山資本といえる木質炭材を窯に立て込み、炭化する炭焼きをしている。

煙導から立ちのぼる一筋の白煙の

匂いと色、風向き、燃焼温度の
火加減を見極めながら五感をフルに

研ぎすませ、ひとり山中で白炭窯に向き合っている。

いま山は荒れて無価値な場所、炭焼き窯は産業遺物、と見なされることなく自然の恵みと上手く付き合えば資源は、無駄なく土に還ることをわたしに教えている。

